



「英語特別プログラム」開講 「現役社長の講話」開講

スーパー連携大学院コンソーシアム web ニュース
2014年10月24日

「英語特別プログラム」開講

技術者・科学者としてグローバル社会で異文化・異なった言語を背景とする人々と協調して調査・研究等で活躍するためのコミュニケーションの手段としての英語を学習する目的で「英語特別プログラム」を電気通信大学で実践しました。参加者は、スーパー連携大学院プログラム受講生 富山大学、大分大学から各2名、電気通信大学から6名の計10名でした。参加者の英語の実力は初級と中級程度(TOEICスコアで、300点台から750点の範囲)で、出席・受講態度は真面目で、ほぼ全員が全ての講義に参加しました。このプログラムは、夏休みを活用して2泊3日の合宿の形(電気通信大学以外の学生)での講習と、後期に実践する E-learning とカウンセリングを有機的に結びつけて英語力を育成するものです。

開講に当たっては、オリエンテーションで特別講習の内容説明および自己紹介(日本語)を実施して、メンバー間の友達づくりの雰囲気を出し出すことから始めました。講義を担当した教員は、樽井(英語発音の基礎)、奥(自己紹介および discussion)、Jeffreys(Discussion)、上原(Presentation)、そして留学生数名が異文化理解・パーティーその他のプログラムで活躍しました。学生の発表した英語表現は録音・録画して保存しており、後期に E-learning とカウンセリングを通してより効果的な英語表現に向上させる予定です。

なお、今回の「英語特別プログラム」を企画・実行した実践的コミュニケーション教育推進室は、平成25年4月に電気通信大学グローバル化教育推進会議の下、課程教育を補強・補完するノン・カリキュラムベースの実践的なコミュニケーション教育およびグローバル化教育の一翼を担う組織として新設されました。大学内のグローバル人材育成に関わる他の諸組織と情報共有しながら、効果的で実践的な特色ある活動を進めています。

TOEIC を言語運用能力の指標として表現した場合、次の3つのモデルを想定しています。

- ・モデルA(国際舞台で充分活躍できる学生 TOEIC スコア 600~800点)
- ・モデルB(標準的な英語力を備えた学生 TOEIC スコア 500~600点)
- ・モデルC(基礎的英語力を備えた学生 TOEIC スコア 450~500点)

このようなモデルに準じた学生を育成するために、全てのプログラムは、一人ひとりの希望者すべてが例外なく確実に英語の力をつけるというモットー(English for One and All)の実現を目指して開発されています。

スーパー連携大学院の学生は、しっかりと専門知識に基づいた先端的な研究に取り組んでおり、その優秀さをグローバル社会に発信したいという意欲に溢れていました。このような学生の夢を実現する手段として英語は必要不可欠であると確信いたしました。今回「英語特別プログラム」に参加したスーパー連携大学院の学生一人ひとりの英語の目標が実現するまで学生とのコラボレーションを大切にしながら支援していきたいと考えております。

(樽井 武 電気通信大学)



英語特別プログラムの教員と受講者

大分大学「現役社長の講話Ⅲ」開講

大分大学開講の「現役社長の講話Ⅲ」は、8月1日(金)～3日(日)に実施され、スーパー連携大学院プログラム受講生は大分大学2名、電気通信大学2名、富山大学1名、開催校の大分大学の3名の計8名が受講しました。

1日目は(株)ターボブレードの発電装置(湯けむり発電:別府市)を見学し、(株)二豊鉄工所(佐伯市)の2カ所の工場見学と戸高信義 会長から創業、ビジネス展開、株式および技術確立などの話のほか、経営において信用の重要性およびそれを得るための苦労について熱のこもったお話をいただきました。

2日目は(株)ターボブレードの林正基社長から起業の基になった技術の売り込みと事業展開について、社長自身が技術者で、経営者でもある視点からお話いただきました。

三信産業(株)の大野嗣男会長からは、建築用資材のレンタル業を始めるきっかけ、事業拡大をする中での苦労、レンタル業についての考え方・足場などの建築用資材のビジネスにおける利点と金融業との類似点などについて、詳しくお話を頂きました。講義終了後、受講生と講師、先生方も参加し情報交換会が行われ、活発な意見交換が行われ、有意義な時間となりました。

3日目は見学内容等を発表するプレゼンテーションを実施しました。受講生の個性がよく表れたプレゼンテーションとなり、互いに意見を出し合い、有意義な意見交換の場となりました。ものづくり系企業の職場の状態、企業経営の面白さと難しさ、将来性などについて理解でき、企業で自分が働くことを意識して自分なりの考えを改めて持つことができたという発言があり、受講生にとって将来を考える良い機会になったことと思います。

(氏家 誠司 大分大学)



(株)ターボブレードの湯けむり発電装置



「現役社長の講話Ⅲ」受講者



講演終了後の意見交換会風景

北見工業大学「現役社長の講話Ⅳ」開講

2014 年度より北見工業大学にて開講となりました「現役社長の講話Ⅳ」は、8月20日(水)～22日(金)に実施され、スーパー連携大学院プログラム受講生は電気通信大学6名、富山大学1名、開催校の北見工業大学7名の計14名が受講しました。

1日目は丸玉産業(株)(網走郡津別町)の本社・津別工場を見学し、北海道産植林木のカラ松やトド松を原材料とした針葉樹構造用合板の製造ラインと、その製造工程で発生した木片を燃焼させるバイオマスセンターの見学をしました。

大越敏弘社長の講話では、北海道の林業政策に応じて業態を変えて来たことや、ニクソンショックやプーチンショックにより海外から国内にシフトして来たことなど、環境の変化に柔軟に対応しチャンスに変えて来た経営実績等についてお話をお聞きしました。社長として一番大切なことは雇用を守ること、また、近年は社会との調和も考え、社会貢献にも力を入れているとのことでした。

2日目は(株)システムサプライ(北見市)を訪れ、門脇武一社長から地元北海道に戻り起業することとなった経緯、また、情報システム活用による情報技術と農業の融合による農業生産法人の(株)イソップアグリシステムの設立や、新しい農業の形態による地域産業の振興についてお話をお聞きし、その後イソップアグリシステムの大豆や小麦の精製工場を見学しました。持続可能な地域経済構築のための緩やかな連携体の構築が必要であり、いろいろな人と交流していくことが大切で、一事業者で背伸びをしてもできないことが、糊代をつくりながら他業種と連携することにより大きなことができる、正にこれがイノベーションであるとお話いただきました。また、仕事に対する喜びを得たら、それは貴重なことであるとも言われていました。

陽気堂クリエート工業(株)(北見市)では、常呂森林公園の広大なメガソーラー発電所を見学し、加藤農夫也会長の講話では、事業の原点となった創業当時のお話、事業継続の困難に対峙したときもお世話になった方との人のつながりや信用を大切にしてきたから現在の事業発展があったというお話をお聞きしました。また、ご自身の経験から、思いやりを持つこと、真面目で誠実に取り組むこと、特に若い皆さんには本をたくさん読んで世界を広げてほしいと言われていました。

終了後、オホーツクビールにて情報交換会が行われ、大越社長、門脇社長、加藤会長、丸玉産業の社員(北見工業大学卒業生)の皆さんもご出席いただき、賑やかに意見交換が行われました。3社とも地域共生と地域雇用の確保を念頭に経営をしていることが印象的でした。

最終日は、3社の社長や社員の皆さんにも参加いただき、2日間の講話と見学を踏まえ、課題を考察したプレゼンテーションを行いました。活発な質疑応答が行われ、受講生それぞれの視点から北見地域の産業振興に向けた提言が出されました。

講義に関する受講生の感想から、「考えを明文化することの重要性を社長さん・会長の講話にて実感を持って学ぶことができた」「普段聞くことができない社長の話、志や思いを聞けてとても満足した」という意見が聞かれました。

(松浦 和子 スーパー連携大学院コンソーシアム事務局)



陽気堂クリエート工業(株)
太陽光発電システムの見学



プレゼンテーション風景



北見工業大学玄関にて集合写真



情報交換会風景

電気通信大学「現役社長の講話Ⅵ」開講

2014年度より電気通信大学で開講となった「現役社長の講話Ⅵ」は、9月24日(水)～26日(金)に実施し、富山大学5名(プログラム受講生5名)、電気通信大学6名(プログラム受講生1名)が受講した。

初日は八王子市にある(株)内野製作所と(株)菊池製作所の2社の企業見学と社長の話を伺った。

(株)内野製作所は、歯車の精密加工を事業とする企業で、自動車を中心とした試作用の精密歯車の加工を行っている。他社では真似ができない高い精度で加工することで、高性能車が競うフォーミュラ1で使用する歯車の受生産を可能としている。世界最先端技術車をつくるためには、それを支える高性能部品が必要であること、海外の高性能車と競うためには、海外工作機械を輸入し同等以上の部品を用意しなければならないこと等の説明を受けた。また、内野徳昭社長から、単に技術を競うだけではなく、社員同士の交流や工場環境整備にも配慮していることが紹介され、実際のところ、清浄な作業空間に見学者は驚きを隠せなかった。

(株)菊池製作所は、板金加工・機械加工を基盤技術とした企業で、「一括一貫」をキャッチフレーズとした、研究開発型企業であった。元東京工科大学教授の一柳健副社長から、主力製品であるマッスルスーツ、介護・災害支援機器の紹介、産学連携で新技術を開発する意義、その難しさやメリットについて伺った。また南相馬地区の大学研究団地構想が紹介され、民間活力の手本のような事業発案に学生一同、驚愕した。

2日目は、スーパー連携大学院コンソーシアム 梶谷誠会長より、スーパー連携大学院の趣旨や電気通信大学が進める総合コミュニケーション科学の意義について、続いて、(株)イーゲル 端山貴也社長、(株)エリジオン 小寺敏正会長、(株)栄鋳造所 鈴木隆史社長の3氏の講話を伺った。いずれも情熱と志の高さに聴講者一同圧倒された。最後に電気通信大学 福田喬学長より、スーパー連携大学院が養成する学生像について、また、本授業で得た体験を糧にどのように進んでいけば良いか等について講話をいただいた。

(株)イーゲル 代表取締役社長 端山 貴也氏(講話)

「イーゲル」とはドイツ語でハリネズミのことである。ハリネズミのように尖った技術で社会に向かう意志を表すことが意図されているが、ドイツで育った社長が幼少期に記憶した言葉でもあるとのことであった。講話では、帰国子女であった社長が、日本の教育制度のなかで自分にマッチする筑波大学に入学したこと、博士の学位を取得すべく、学生時代に苦勞したこと、これが起業のきっかけとなったことが印象的であった。端山社長は、しっかりと学んだ知識が先端技術開発に必要であることを強調していた。(株)イーゲルでは、「わからないがうまくゆく」ということをよしとせず、原因をきちんと追求することで高い技術と高品質を担保することを重要視していることに会社の特徴が感じられた。

(株)エリジオン 代表取締役会長 CEO 小寺 敏正氏(講話)

「エリジオン」とはギリシャ語で「至上の幸福、理想郷」を表しており、小寺会長は、技術者の理想郷を目指して起業した。講話では、国を想い社会を想い技術を創ることの意味、将来を見据えた技術や事業展開の重要性が語られていた。学生へのメッセージは熱く、自分の得意分野で勝負することを強く勧める姿勢は、「なんとなく、言われるがまま」に日々を過ごす学生たちには目の覚める思いであったであろう。



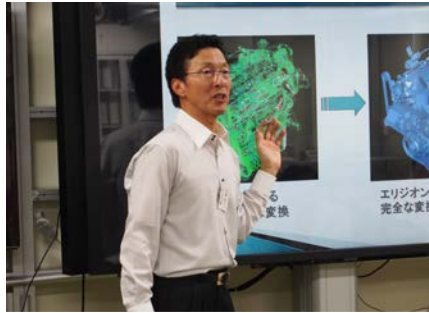
(株)内野製作所の見学説明



(株)菊池製作所 マッスルスーツ



(株)イーゲル 端山貴也氏



(株)エリジョン 小寺敏正氏



(株)栄鑄造所 鈴木隆史氏

(株)栄鑄造所 代表取締役 鈴木隆史氏(講話)

創業は祖父の代で、先代である父親の突然の逝去から母親に懇願され会社を手伝うことになり、大きく人生が変化した若き日の鈴木社長の様子がドラマのように語られ、とても印象深かった。また、匠的な鑄造技術を新技術の導入により壁を低くし、新たな事業展開に結びつけた点や、海外にいち早く目をつけて事業展開を進める様子は、机上の話では得られない実体験に基づく説得力があった。また難民を社員として受け入れ、海外へ事業展開する方法は、斬新であり、学生にも印象強く残った。

3日目は、工場見学と講話を踏まえた報告を発表形式(発表7分質疑5分)で行った。

本授業は、教科書から知識を学ぶ多くの授業とは異なり、実体験を元にした社長の講話(学生に伝えたいこと)であったと感じている。情報社会となり、世界中の知識は一瞬にして手に入る時代である。もはや情報を記憶することの意義は薄れ、知識や情報を如何に組み上げて新しいものを創生できるかが次世代の勝負となろう。本授業では、そのようなメッセージが随所に見られたと考えている。「誰もやらないこと」と「誰もが望むができないこと」は違う。この違いを明確に見極め、実行した社長達の講話は、学生よりも自分に学びがあったと感じている。

(牧 昌次郎 電気通信大学)



情報交換会にて